遺跡から道を考える

佐藤　啓

１　はじめに

道は、村や町・都市をつなぐ重要な場である。しかし考古学において、道の発見は偶然性に左右される部分が多い。そのため、道跡の調査例は決して多くはない。また、広範囲を調査対象としなければ道としての認定すら困難で、他遺構との関係も把握しえないという欠点も有している。そこで本稿では、道跡研究がもつ可能性について、３例の予察を提示してみたい。

２　県内における「道」の発見例

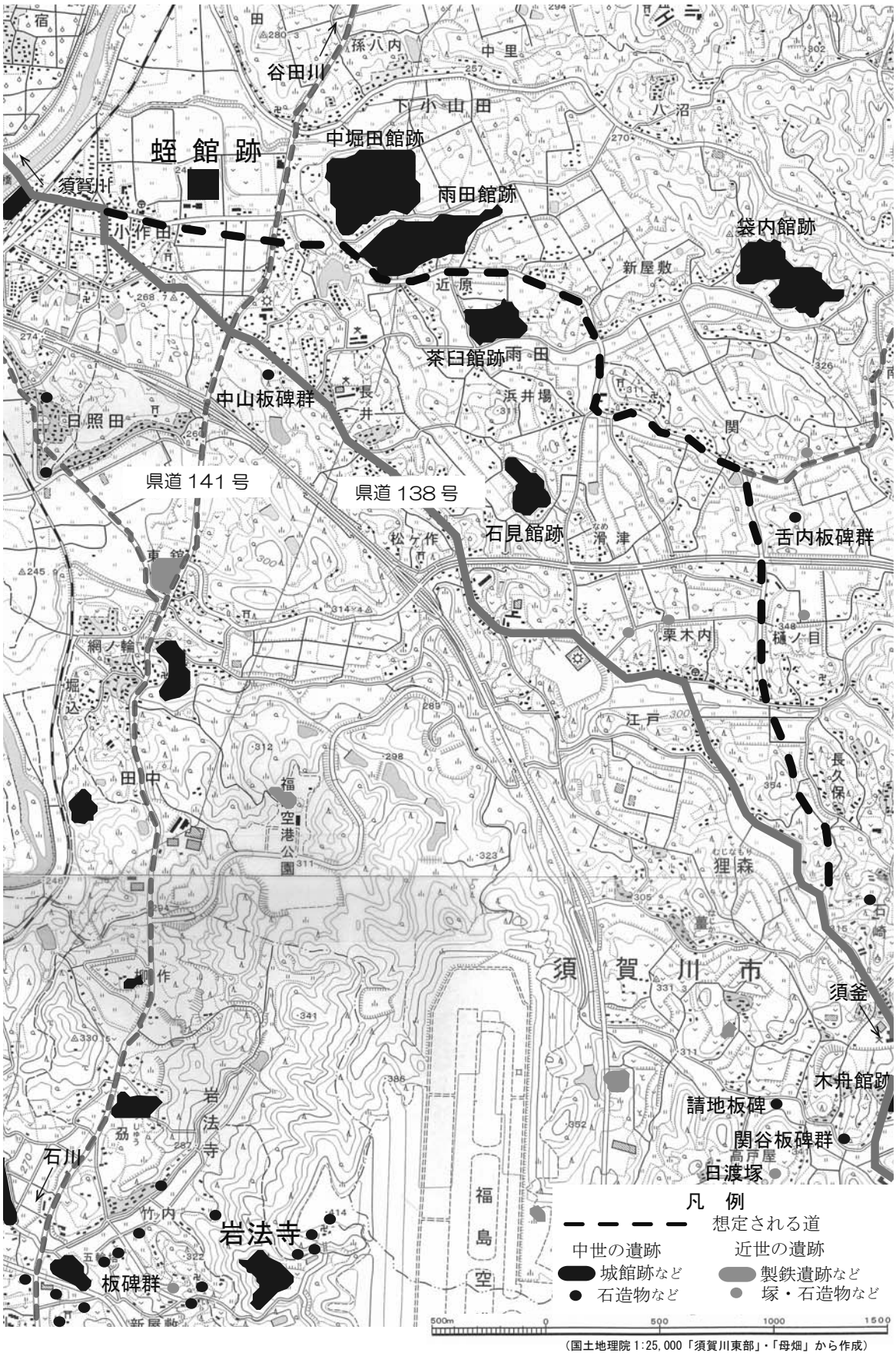
県内で検出された、主な中近世の道跡として、郡山市荒井猫田遺跡・馬場小路遺跡・馬場中路遺跡、川俣町河股城跡、白河市芳野遺跡・会津街道跡、石川町殿内Ａ遺跡、国見町阿津樫山防塁、桑折町新宿遺跡、須賀川市稲村御所跡、会津若松市本一ノ丁跡などの道路遺構があげられる。このほか当館で資料を収蔵している小野町鴨ヶ館跡・谷津作館跡、石川町古宿遺跡、南相馬市北山下遺跡などでも道路状遺構が確認されている。

県内における考古学的道跡の研究は、郡山市荒井猫田遺跡の発掘調査を画期とする（註１）。荒井猫田遺跡以前の 1990 年前半代までは、道跡そのものの検出例がほとんどなかった。したがって、道に関連する特定の遺構・遺物から「宿」・「市」といった性格を推定したり、調査成果と地籍図等を対比して、近代以前の状況との関係性を探る分析に終始せざるをえない状況が続いた。ところが、1990 年代後半に荒井猫田遺跡が調査され、それぞれ面する道を異にする、鎌倉時代の「館跡（やかたあと）」と室町時代の「館跡（たてあと）」が検出された。また、町屋や木戸、交差する道、橋なども発見され、道と町や「館」との関係にまで言及できるようになり、道跡の研究のみならず、県内の中世史研究を大きく進展させる成果が得られた。これ以降、芳野遺跡（註２）や稲村御所（未報告）でも道に面する館や町屋が、国見町（註３）・桑折町（註４）で「奥大道」の可能性が指摘される道跡が発見されている。

このように、近年の調査成果によって、道と館や町屋・宗教施設などとの有機的関連を推定できる段階に至っているといえよう。

３　遺跡分布から道を復元する（図１）

県内の中世城館跡はおおむね現在の大字や字ごとに分布している。これは戦国期の町や村の数と大差ないと推定されており、『ほとんどの村落に在地領主がおり、その城館に居住していた』と考えられている（註５）。各地に作られた城館の周辺には領民が暮らす集落が存在した可能性が高いことから、城館跡の分布は集落の存在を示唆し、ひいては集落間を結ぶ道の存在も示唆することになる。県内の中世城館跡は平地式館跡と山城とがあるが、平地式館跡がより集落に近いことはいうまでもない。



（国土地理院 1:25,000「須賀川東部」・「母畑」から作成）

図１　遺跡分布図

蛭館跡は、須賀川市小作田字蛭館に所在し、阿武隈川東岸の河岸段丘面に立地する平地式館跡である。昭和 61（1986）年に調査が実施されており、遺跡は現地保存されている。部分調査しか実施されておらず詳細は不明だが、館跡は、主に 13・14 世紀と 16 世紀の２時期に営まれたと推定されている（註６）。

現在、蛭館跡の南西には須賀川市狢森地区を通り石川郡玉川村須釜地区に至る県道 138 号が走り幹線道路となっており、館跡の南を東西に走る道路は市道となっている。

ここに遺跡分布を重ねてみると、現在の幹線ルートと異なるルートを想定せざるを得ないことが分かる（図１）。県道 138 号沿いには中近世の遺跡や寺社がほとんどみられないのである。一方、蛭館跡の南を走る市道沿いには、蛭館跡の東に中堀田館跡・雨田館跡・茶臼館跡の館跡や無量寺がならぶように所在している。この道は字関の三叉路を右に折れて南下し字狢森周辺で県道に合流するが、南下する路線上にも舌内板碑群や極楽寺など中近世の遺構が所在している。このことから、中世段階の幹線道は、むしろ蛭館跡の南を走る市道側だったと推測される。事実、須賀川市役所大東支所が所蔵する年不詳の「石川郡川東村大字小作田」絵図（註７）には、市道に相当する道路のみが描かれ現在の県道は成立していない。川東村の成立は明治 22（1889）年であるから、この絵図は明治時代後半以降の成立であることが分かる。つまり、幹線ルートの変更は明治時代後半以降であったことが理解できる。

蛭館跡から東方に向かい、字関の三叉路を左に折れ北上する道には袋内館跡や蛇頭館跡・八幡崎館跡をはじめ、近世の塚群が点在していることも、この道が中世に遡ることを示す所見といえる。狢森以南においては、県道の東西に館跡・板碑群などが多数確認されており、この部分は中世に遡る幹線道だったことが確実である。

また、蛭館跡東方には、県道 141 号が南北に走っている。この道沿いにも１～２㎞間隔で館跡が分布しており、阿武隈川沿いに南下すると板碑群で著名な玉川村岩法寺地区を経て国道 118 号に合流し、大字川辺そして石川町に至る。この道も中世に遡ることが確実といえる。さらに、字小作田から阿武隈川に沿って段丘崖下を通行し字日照田から県道 141 号に合流する間道の存在も想定できる。

以上の検討から、中世段階における阿武隈川東岸の交通路を想定した。山城には道を引き込む例があるなど、図１の想定ルートとの差異が多々あるだろうことは承知しているが、遺跡（特に館跡）の分布から道や交通路を想定する方法は、在地領主の勢力範囲を考えるにあたって有効である。

４　道から他遺跡を考える（芳野遺跡，図２）

ここでは、発見された道跡から、遺跡間の関係性を考察できる事例を提示する。

芳野遺跡は白河市白坂芳野に所在する。平成 17･18（2005・2006）年に発掘調査が実施され、中世から近世初頭にかけて営まれたことが判明した（註８）。主な遺構は、屋敷を構成する掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡とともに、道跡と考えられる溝跡などが検出されており、道に沿って建物が並ぶ町屋が調査され、『白河風土記』に記載された「吉野宿」に比定されている。

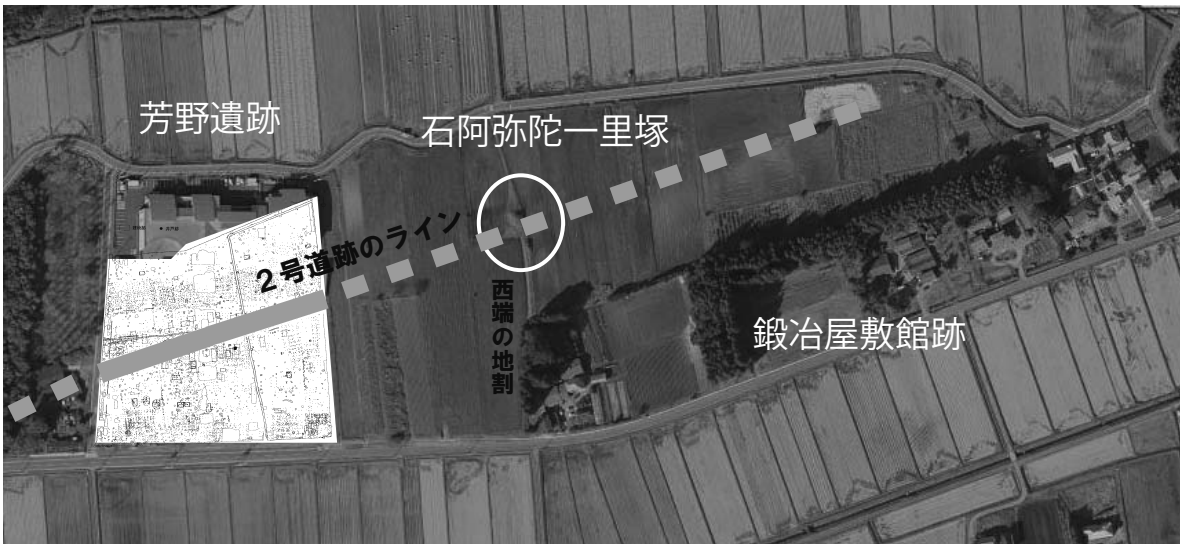


図２　芳野遺跡と鍛冶屋敷館跡

道跡には３期の変遷があり、それぞれの年代は、第１・２期（１号道跡・３号道跡）が鎌倉時代から室町時代、第３期（２号道跡）が江戸時代初頭を下限とすると想定された。このうち第１・２期の道跡は調査区中央部を横断し、路線がほぼ同一のルートを保持している。これに対し、第３期の２号道跡は軸線を北東に変え、そのまま東に延長すると、遺跡に隣接する石阿弥陀一里塚を通過することになることから、２号道跡と一里塚が、同時期に機能していたと考えられる。石阿弥陀一里塚は慶長９（1604）年の設置、２号道跡の廃絶は寛政６～９（1629～1632）年の廃絶と考察されている（註９）。

ここで注目したいのが、一里塚の南方に所在し、道の推定ラインと並行するように東西に走る地割である（図２下部）。この地割は途切れながらも鍛冶屋敷館跡を中心に延び、道路を挟んだ東方にも確認できる。また、この地割は館跡西方にも続き、その西端は低い土塁を伴って北に延び一里塚に至っている。このように、２号道跡と一里塚、そして鍛冶屋敷館跡を中心とした地割に強い関連性があることから、２号道跡が機能した時間幅の中で、ある時期に同時存在していた可能性が高い。一里塚の設置年代を考慮すれば、道と地割の関係は江戸時代初期には確立していたことになる。

鍛冶屋敷館跡とこれに続く区画の性格や年代については諸説あり、いまだ定説はない。道から屋敷１区画分（約 40 ～ 50 m）離れていることから推定すれば、例えば防火林や防風林のような、町並みの背後を保護する施設の可能性も考慮すべきであろう（註 10）。

本節では、検出された道跡から、発掘調査が行われていない遺跡との関係を考察できる事例として紹介した。

５　文献史料から道を考える（久川城跡，図３）

ここでは、よりマクロな意味での「道」を考える。

久川城跡は、南会津郡南会津町青柳に所在する城館跡である。これまで数度の調査が実施されており、平成 21 年度には本丸櫓台を対象とした試掘調査で、大形の礎石建物跡が検出され

た(註11)。築城は天正17（1589）年とされる(註12)が、現在目にする遺構は、天正18（1590）年に蒲生氏郷が会津に入封して以降の所産と思われる。

久川城跡は、山深い奥会津に所在することから、上州道に関連する城であろう事は推定されていたものの、近世城郭としての位置づけが難しい城跡であった。ところが、文献史料を検討するなかで「境目の城」のすがたが浮かび上がってきたのだった(註13)。

図３　慶長５年８月の書状ルート

竹井英文氏が指摘したよう(註14)に、慶長５（1600）年の「関ヶ原合戦」時(註15)、石田三成をはじめとする上方（いわゆる西軍）の武将たちが、真田家を介し、上田と沼田を経由して会津の上杉景勝と連絡を取っていた(註16)。沼田を経由した使者は尾瀬を越えて上杉領に入国したと考えられる。徳川家康の直接攻撃こそ逃れたものの、宇都宮に在陣する徳川秀忠・結城秀康に仙道を、越後の堀秀治に越後道をそれぞれ抑えられ、北方は伊達政宗や最上義光と接していたため、上杉氏にとってこれらに通じる道が情報伝達ルートにはなりえなかった。つまり上州道は、四面楚歌といっていい状態だった上杉氏が上方勢と連絡を取ることができるほぼ唯一のルートで、上杉氏の生命線ともいえる道であった。そして、上州道を通って会津に入った最初の城が伊南城（久川城跡）であり、このルートの確保が伊南城の最大の役割であったと考えられる。

しかし、家康方の真田信幸が八月中旬頃に「信州口」と「会津口」を封鎖することにより、上方と会津の連絡経路が遮断されることになり、両者の連絡が困難になったことが「関ヶ原合戦」の結果に影響を与えたと考えられる(註17)。

以上のように、交換された書状を介することで、大坂城（豊臣秀頼）→佐和山（石田三成）→上田城（真田昌幸）→沼田城（真田信幸）→伊南城（久川城跡、城番清野長範）→若松城（上杉景勝）という道が推定でき（図３）、このルート上に所在する伊南城（久川城跡）の歴史的な意味も明確になってきたのだった。つまり、伊南城に配置された武将たちは、上州道とこれを通過する文物の管理を担い、時には使者を検分し、食料や物資の補給を行ったと推測される。これこそが上州道に所在する「境目の城」としての久川城跡の役割であった。

６　おわりに

以上、３つの例をあげて、遺跡と道から地域の歴史を復元する方法を提示した。今回の例はあまりに粗雑であり、今後、より緻密な検討を経る必要がある。それがなされたとき、道跡が歴史研究に与える可能性はより一層広がるはずである。

齋藤慎一氏は「独自の方法論のみで歴史像を構成するのではなく、他分野の方法論を併用す

ることにより学際的な研究を模索する」必要性を説く(註18)。この言葉は、城郭研究に対して発せられたものであるが、当然、考古学研究にも該当すると思われる。今後は、歴史学をはじめ城郭研究や歴史地理学も含めた多様な視点から、道や地域を復元していきたい。

なお、本稿は、平成29年８月17日～11月30日に開催した常設展示「みんなの研究広場　蛭館跡の調査成果」をもとに修正・加筆したものである。

＜　註　＞

（註１）郡山市教育委員会　1998　『荒井猫田遺跡（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区）－第１～６次発掘調査報告－』ほか
（註２）白河市教育委員会　2008　『芳野遺跡発掘調査報告書』
（註３）国見教育委員会　2015　『阿津賀志山防塁史跡指定調査報告書』
（註４）廣川紀子　2017　「桑折町　新宿遺跡」『平成29年度福島県考古学会　第59回発表要旨』福島県考古学会
（註５）福島県教育委員会　1988　『福島県の中世城館』
（註６）福島県教育委員会　1987　「蛭館跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告23』
（註７）（註６）図版49
（註８）（註２）に同じ
（註９）（註２）。及び白河市　2001　『白河市史　四』
（註10）鍛冶屋敷館跡とこれに続く地割（土塁）の性格については，防塁説・館跡説・集落説にまとめられるが，防塁説は根拠に乏しいといわざるをえない。また，その成立が慶長９年以前である可能性も当然考慮すべきであるが，慶長５（1600）年を前提にすべきでない。
（註11）南会津町教育委員会2017『久川城跡試掘調査報告』
（註12）伊南村史編さん室　2011　『伊南村史　第１巻（通史編）』
（註13）佐藤啓　2018　「「関ヶ原」前夜、上杉景勝文書の再検討」『福島史学研究』第九十六号　福島県史学会
（註14）竹井英文2014「真田と上杉を結んだ道」『関ヶ原合戦の深層』高志書院
（註15）筆者は，「関ヶ原合戦」に伴う奥羽と越後において展開した戦闘を「慶長奥羽越合戦」と呼称している。佐藤啓2016「久川城跡と鳴山城跡」『企画展「城跡の考古学」関連シンポジウムⅠ　城跡を掘る』資料　福島県文化財センター白河館、および（註11・13）。
（註16）米山一政編　2005『真田家文書　上巻（改訂）』真田宝物館
（註17）註11・13に同じ。
（註18）齋藤慎一2002「序章」『中世東国の領域と城館』吉川弘文館

なお、個別遺跡の報告書は割愛した。